

刈屋さんちの安心野菜



八百屋新聞

創刊号

刈屋さんちの
安心野菜

〒940-0145
新潟県長岡市
栃堀 2885-6

電話 / FAX
0258-89-7689

E-mail
kariya.br@gmail
.com

ブログ
<http://blog.livedoor.jp/kariyabr/>

ツイッター
kariyabr

――創刊のあいさつ――

はじめまして、刈屋兄弟です。

この春、私たちは数年間あたたか
ま続けてきた「母なる地で農業をす
る」という夢の種を栃尾の大地に
蒔きました。私たちは長岡市栃堀
という山間の地で、6反ほどの畑
を借りて野菜を育てています。本
誌は「八百屋新聞」と題して、野
菜の生長過程、日々の暮らし、考
えていること、好きな本などを、
新鮮な野菜とともにお届けしたいと
思います。何分畑仕事の合間を縫っ
て執筆しているため、刊行日程は
お天気次第、体力次第、気分次第

となりませんが、芽の出ない日も気
長にお待ちいただけましたら幸いです。

本誌を発刊するにあたって、イ
ンスピレーションを授けてくれた
「籠屋新聞」社主稲垣尚友さん、私
たち兄弟を丸ごと受け入れ農業を
教えてくれた堀江家のみなさん、
藤井吉朗さん、恩師高橋ハムさん、
和栗百恵さん、私たちが新潟で心
ある道を歩けるように導いてくれ
たF / s t y l eのお2人、そし
ていつも1番傍で支えてくれる刈
屋家、荒木家の人たち、ここまで
育ててくれたすべてのみなさまへ、
改めてお礼申し上げます。

— はじまりのきつかけ —

栃尾にある母の実家は、16代続く農家です。私たちの祖父は、

先祖が切り開いた田畑を今日まで大切に受け継いできました。しか



し、祖父母の次なる世代はみな都市部で働いており、農業を継いでいこうという人はいませんでし

た。東京で学生生活を謳歌してい

た私たちは、「農業従事者の高齢化」

「農業の後継者不足」が社会問題と

して叫ばれているのを他人事によ

うに聞き流していました。

そんなある日、大学の授業にス

ペシャルゲストとして山口の農業

青年が颯爽と現れました。彼の眼

には濁みがなく、嘘のない生き方

をしている人だと直観的に感じま

した。堀江さんというその青年に

惹かれ、山口県岩国市錦町にある

彼の家に通うようになりました。

堀江さんは全く農業経験のない段

階から兄弟で家の田畑山林を活か

していくために起業して、農を生

業として生きている人でした。堀

江さんと交流する中で次第に、私

たち兄弟も栃尾で、祖父母の跡を

継いで農業をしようと思うようにな

りました。そして弟の将志が2

年間、兄の高志が半年間堀江さん

の家に住み込みで農業研修をさせ

てもらいました。

先に研修を終えた弟は、より広

い世界を見ようと全国を旅し、兄

は農業研修をしていたとき、東日

本大地震が起こりました。悲惨な

ニュース、一方で動き出す復興へ

のエネルギーを前にして、私たち

にできることは何だろうか？ と2

人で話し合いました。一時はボラ

ンティアとして現地に入ることも

考えました。しかし東北・北関東

の農業は、震災の被害のみならず

福島第一原発の事故で大打撃を受

けています。それなら被災地に近

い新潟、しかも先の震災で全国か

ら多くの支援を受けた中越地域か

ら自分たちのような若者が立ち上

がることに、意味があるのではな

いか？ と思い、予定を1年早め

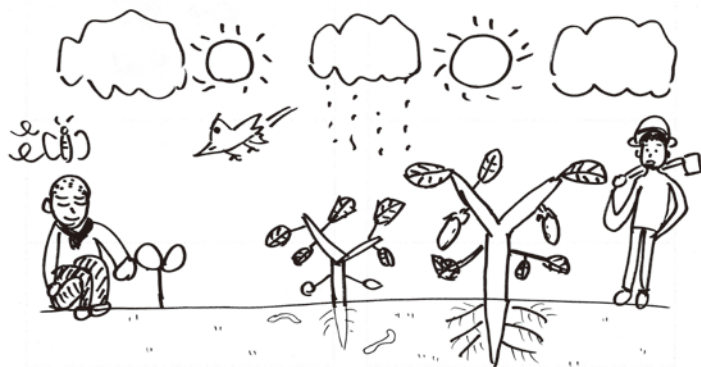
て栃尾で起業することにしました。

— 野菜を育てる想い —

現在日本の多くの農家は、ただ野菜を作るだけで、どこで誰が食べているかをほとんど知りません。そんな生産者と消費者の顔の見えない関係、媒介者の過多が、食品の安全性・質の低下、中間コストの増加を生んでいます。そんな世の中で、私たちはまずは自分が安心して食べられる野菜づくりをベースに、自分たちの野菜を食べ、ほしいと思う人、自分たちの野菜を求めている具体的なあなたのために野菜を育て、お届けします。そして、おいしいものを食べたとき自然とほころぶ笑顔が、またとなりのあなたにかい笑顔へとつながっていくことを願って、今日も畑に立ちます。

— 農法について —

私たちにはほにゃらら農法という確固とした農法はなく、基本的には「野菜を育てる」よりも、「野菜に育ってもらおう」という考えのもと、畑に立っています。野菜はあくまでも植物であり、水と光が「それなり」にあり、土が「それなり」の状態にある環境であれば育ちます。「それなり」とは多すぎず、少なすぎず、暑すぎず、寒すぎず、乾きすぎず、湿りすぎず……それぞれの野菜がもつ性質・形態にあったという意味です。化学合成農薬、化学合成肥料など野菜の力を奪ったり、減じてしまうものは使わず、野菜が「それなり」に育つ環境を想像・創造していくのが私たちの農法です。



《日々是耕日》

―ハウス事件①―

一般的にトマトを育てるのに、水はいらないといわれている。ト

マトは、アンデスの乾燥地帯出身で、もともと乾いた土地を好む。

加えて、熟しかけたトマトが降雨などで急激に水分を吸収すると、実が割れてしまう。

しかし、雨よけ用にハウスを建てるとなると、数10万の金がぶつ



飛ぶ、とい
うかそんな
大金どこに
ある、いや、
ありませぬ。
という
ことで家
にある資材

で、簡易ハウスを建てることに。そして、わずか3日で完成。「一夜城」と命名する。

―ハウス事件②―

3匹の子豚という話がある。恐ろしい(とされる)オオカミがやってきて、子豚が建てたわらの家の家を次々と壊して子豚たちを脅かしていくが、三男が建てたレングアの家をオオカミは壊せずに、ついに子豚たちは難を乗り切る、



という話だ。
ハウス建築3
日目に私たち
を、オオカミ、
ではなく、台
風、でもなく、
雨、が襲い、

「一夜城」はもろくも三夜で落城してしまつた。

ここで、子

豚なら、優秀な三男が出てきて知恵を出してくれるのだが、あいにくそんな子豚はいない(私は二男である)ので、私たちは徹底抗戦の意思を捨て栃尾のオオカミ



に屈服することにし
た。そして、
できたのが
「ベルリン
の壁」ならぬ、「
栃尾の壁」だ。



―堆肥が、動いた―

袋につめた堆肥をトラックに載

せてもらおうところまではよかった。

祖父の骨董品のようなトラックは、

嫌な音を出しながらも畑まで辿り

着いた。でも動かない堆肥。それ

もそのはず重量級の力士3人を載

せたよりも重い堆肥を2人で引つ

張ろうというのがそもそも無理

だった。そこで祖父母に出動要請

をかける、が、80歳のお年寄りが

2人加わったところで動くはずは

ない。しかし、

そこは歳の功、

鉄棒をテコの

要領で動かし

ながら見事堆

肥を下ろすこ

ろに成功した。



《刈屋家訪問記録》

（伏木洋平（早大4年））

はじまりに起業という言葉のも

つ華々しさは全くなかった。何よ

り刈屋兄弟が起業するはずが、そ

こに弟の姿はなかった。弟は東京

のアメ横でデートしていた。

最初に伏木青年が任された仕事

は引つ越しだった。刈屋兄弟が食

べるもの、着るものから仕事で使

う事務用品の類まで全てを家に搬

入・整理した。続いて掃除。チリ

トリにホウキなどという粋な用具

を使うこともなく、手には軍手、

口には

マスク、

頭には

手ぬぐ

いをま



いて50年ほったらかしにしてきた
倉庫に挑む。50年のホコリが体や

頭にふりかかり、祖父さんの選挙

ポスターやら熟成しすぎた梅やら

判別のつかないなんかんや、てん

やわんやな物が掘り出された。

滞在した1週間で伏木青年が最

も活躍してくれたのは、水路掘り

だった。借りた畑は元々田んぼで

水はけが悪い上に排水路も決壊し

ていて水浸しの状態。そこにスコッ

プ1本で水路と対峙すること丸2

日。水は徐々に引き、畑が姿を現

した。現在その水路は伏木青年の

功績を称

え、「伏

木水路」

と呼ばれ

ている。



《今号の1枚》

（愛犬タローも食べた！）



初出荷

を果たし

た夜、我

が家の食

卓に上

がった大

根の間引

き菜を、

なんと愛

犬のタ

ローが美味しそうに（やらせのようにな）食べてくれました。実は出荷した野菜の大半が売れ残って帰ってきてしまったのですが「犬も食べるんだからきつと美味しいはずだ」と気を取り直すことができました。ありがとう！ タロー。

《晴耕雨読》今号の1冊》

（北方謙三『水滸伝』集英社）



中国の古典『水

滸伝』を大胆に

再構築した時代

小説。単行本全

19巻。12世紀初

頭中国宋代末という舞台設定を借りて、著者お得意の「漢（おとこ）」

の死に様（＝生き様）を惜しみなく描いてくれる。戦闘シーン、拷

問シーンがリアルに表現されているのは、全共闘運動に参加してい

た著者の実体験からきている。刈

屋兄は高校から、弟は小学校からの愛読書で、現在栃尾で取り組ん

でいる野菜づくりの着想も、大本

を辿れば本書からきているといっ

ても過言ではない。

【編集後記】

「自分たちの新聞をつくらう

ぜ！」といって話が盛り上がって

から、実際に動き出すまでだいぶ

時間がかかってしまったものの、

梅雨入りのおかげでついに発刊に

こぎつけることができた。本誌制

作にあたり大いに参考にさせてい

いただいたのは、私たちの師でもあ

る稲垣尚友氏の「痴報籠屋新聞」

である。「籠屋新聞」は現在33号ま

で発刊されている。「痴報誌」の雄

であるが、我々も負けずに刊行を

重ねていけたらと思う。また、よ

り面白い誌面づくりを目指すため

にも、ぜひ読者諸氏のご批判を仰

ぎたい。

（※痴報籠屋新聞はトカラ塾ホームページより閲覧可能です。）